



<b>Data</b>	2022-82
監督:	バズ・ラーマン
脚本:	サム・プロメル/バズ・ラーマン/クレイグ・ピアース/ジェレミー・ドネル
原案:	ジェレミー・ドネル
出演:	オースティン・バトラー/トム・ハンクス/ヘレン・トムソン/リチャード・ロクスバーグ/オリヴィア・デユング/ヨラ/シヨカ・デュクレ/アルトン・メイソン/ケルヴィン・ハリソン・Jr

## 👁️👁️ みどころ

ビートルズの来日とGS（グループ・サウンズ）の大ヒットは私の高校から大学にかけてだが、エルヴィス・プレスリーの大活躍は、私の中学時代から。腰を振り、絶叫するステージに若い女の子は大騒ぎだが、私も映画にはしびれたものだ。唯一(?)のバラード曲『好きにならずにいられない』は、カラオケ大好き弁護士だった私のピアノ伴奏での持ち歌の1つだった。

そんなエルヴィスの一生が、マネージャーであるトム・パーカー大佐の視点から159分間にわたって実況中継。『アマデウス』(84年)は、凡才サリエリによる天才モーツァルトへの一方的な嫉妬心から殺意に至るストーリーが見モノだったが、本作では“一心同体”で歩む2人の葛藤をじっくりと！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□ 『Ray/レイ』も必見だったが、本作も必見！ □■

私の中学時代は、厳しい校則に縛られる不自由な生活の中でも、映画館に通い、将棋に熱中し、ラジオで音楽を聴いていた。聴いていた音楽のメインは、「全国歌謡ベストテン」をはじめとする歌謡曲だったが、少しは“洋楽”もあった。日本にやってきたビートルズの日本武道館での公演に日本中が熱狂したのは1966年6月、私の高校生の時だが、レイ・チャールズの『愛さずにはいられない』を聴いたのは1962年で、私が中学生の時。しかし、それよりもっと前にはじめて聴いて耳に残っていた“洋楽”が、エルヴィス・プレスリーの『ハートブレイク・ホテル』(56年)や『監獄ロック』(57年)、そして唯一のバラードで覚えようとした『好きにならずにいられない』(61年)だ。

それから十数年後の1980年代、弁護士として独立した私は、バブルに突入した時代状況の中で弁護士業務に励む一方、連夜の北新地通いを続けていた。カラオケ自慢の私がそこで歌っていたのは、最新のヒット曲からフォーク、演歌、なんでもござれ。とりわけ、

キーを少し上げてのバラードの“女歌”が得意だった。しかし、たまにピアノ伴奏で“洋楽”を歌うバーに行くと、そこでの私の持ち歌は、①ブレンダ・リーの『この世の果てまで』、②アンディ・ウィリアムスの『慕情』の他、③レイ・チャールズの『愛さずにはいられない』と④エルヴィス・プレスリーの『好きにならずにはいられない』だった。

しかして、2004年6月10日に73歳で亡くなった盲目の黒人歌手レイ・チャールズの物語は『Ray/レイ』(04年)、『シネマ7』149頁)で見見だったが、1977年8月16日に42歳の若さで亡くなったエルヴィス・プレスリーを描いた本作も見見!

## ■□■戦後の音楽は?日本は美空ひばり!米国はエルヴィス!■□■

戦後の日本の音楽(歌謡曲)は、『リンゴの唄』と共に始まったが、1945年の戦後アメリカの進駐軍が持ち込んだジャズ音楽の中で、戦後の日本歌謡の花を開かせたのが1937年生まれ的美空ひばり。1949年以降に次々と発売された『越後獅子の唄』『私は街の子』『リンゴ追分』等は、は純日本調だが、『河童ブギウギ』等は完全な洋楽。私が中学時代に夢中になり、日本レコード大賞を受賞した『柔』は演歌の名曲だったから、とにかく、この天才少女はなんでもござれだった。

美空ひばりとはほぼ同世代の1935年生まれのエルヴィス・プレスリーは、幼少時代から黒人居住区の近くに住んでいたこともあってゴスペルに慣れ親しみ、白人と黒人両方の教会音楽を吸収したらしい。そんなエルヴィスなればこそ身につけたのが、カントリーとゴスペルを融合した新たなロックだ。11歳の時に、地元のものど自慢大会のご褒美として両親からギターをプレゼントされた彼は、ラジオから流れるカントリー、ブルース、ポピュラー等の音楽を通じて、独学で自分の音楽を作り上げていったらしい。13歳の時に両親が夜逃げ同然でメンフィスに引越した後、歌手として身を立てる決心をした彼は、高校を卒業した16歳の時に歌手デビューしたが、それが1954年7月のことだ。

本作導入部では、オースティン・バトラー演じるそんなエルヴィスの姿をしっかりと確認したい。

## ■□■ロック=不良。それは日本でも米国でも同じ?■□■

エルヴィス・プレスリーは世界史上最も売れたソロアーティスト。彼がいなければ、ビートルズもクイーンも存在しなかったことは疑うべくもない。しかし、エルヴィスが、ゴスペル、カントリー、ブルース、ポピュラー等、さまざまな音楽を融合して始めたロックやロックンロールは、今でこそ当たり前の音楽として認知されているが、1950年代の“古き良き米国”では、ロックは不良(音楽)!腰をふりふり、マイクの前で絶叫するロック歌手エルヴィス・プレスリーはその代表だ。ステージ上で彼がそれを歌い始めると自然に腰がぐねり、全身が揺れ始めたが、それを見た観客席の女の子たちは、そこに何かを“感じた”ようで、次々と絶叫、興奮、中には失神する女の子も。

日本では、1958年に東京・日劇で「第1回ウエスタンカーニバル」が開かれ、山下

敬二郎、平尾昌晃、ミッキー・カーチスの「ロカビリー3人男」が登場し、ロカビリー全盛時代が始まった。彼らのステージは美空ひばりのステージとは全く異質のもので、まさにエルヴィスのステージそのものだった。そのため、中学時代の私にとって“そんな奴ら”はみんな不良で、善良で従順な生活を送る私には程遠い世界だった。そして、それは米国でも同じだったようで、ロックのエルヴィス=不良のエルヴィスがステージに立つ舞台では、あれやこれやの問題が次々と・・・。

## ■□■歌手とマネージャーは一心同体が理想？それとも？■□■

トム・ハンクスは、米国を代表する俳優だが、私には『プライベート・ライアン』（98年）『シネマ1』（117頁）に見る“若き日”の彼の演技が印象深い。その後『ブリッジ・オブ・スパイ』（15年）『シネマ37』（20頁）、『ハドソン川の奇跡』（16年）『シネマ39』（218頁）、『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』（17年）『シネマ41』（37頁）等で名俳優の座を獲得していったが、さて本作のトム・パーカー大佐役は？

エルヴィス・プレスリーは誰でも知っているが、マネージャー役として彼と一心同体の存在だったトム・パーカー大佐（トム・ハンクス）の名前を知っているのは業界関係者だけだろう。「私は伝記映画が好きなんだ。だけど、単純にその人の経歴を紹介するような映画を作りたいと思ったことはない」。そう明言するバズ・ラーマン監督は、『アマデウス』（84年）がモーツァルトをサリエリの視点から描いたことを参考に、エルヴィスをトム・パーカー大佐の視点から描くことに。その点について、彼はパンフレットの中で、「この映画は『エルヴィス』という題名だが、トム・パーカー大佐の物語でもある。彼は“信用できない”本作の語り手ながら、私たちがこの物語に入るきっかけを作ってくれる」と語っている。それにも注目。

しかし、そもそも、トム・パーカー大佐とは一体何モノ？彼は本当に軍人なの？「ナイトメア」（悪夢）、「アリー」（小路）をタイトルにした『ナイトメア・アリー』（『シネマ50』（31頁）は「カーニバル」（見せ物小屋）を舞台にした、おどろおどろしくも面白い映画だったが、トム・パーカー大佐の“職場”もカーニバルだったらいい。したがって、『ナイトメア・アリー』の中で、怪しげな獣人から一流の読心術師、興行主にのし上がっていった主人公と同じように、トム・パーカー大佐もさまざまな興行に寄与する商品（人材）探しの能力には長じていたらいい。カーニバルの興行主としてのそんな彼が、若き日のエルヴィスの、腰をクネらせて動き回る姿を見、心の中からほとばしり出るロックの歌声を聞くと・・・。

たしかに、トム・パーカー大佐はショービジネスを開拓したパイオニアで、エルヴィスが持つ才能を見抜き、巨大な可能性を見出した偉大な人物だが、それから長く続くエルヴィスとの関係は？モーツァルトとサリエリとの関係は、サリエリなど目にもくれない天才モーツァルトに対して一方的に嫉妬の炎を燃やし続ける凡人サリエリの反乱で“ケリ”がついた。しかし、エルヴィスはトム・パーカー大佐のマネジメント能力によって大スター

になり大金を稼いでいるのだから、この二人はまさに一心同体そして運命共同体だ。そんな2人の“良き関係”はいつまで続くの？

## ■□■1960年代の活躍は？その表と裏は？光と影は？■□■

アメリカには徴兵制があるが、エルヴィスは？ボクシングのヘビー級チャンピオンだったカシアス・クレイことモハメド・アリは宗教上の理由から徴兵を拒否したことによって大問題になったが、エルヴィスはどうしたの？本作では1950年代末から60年代にかけてのそんなエピソードも描かれるので、それにも注目！

他方、パーカー大佐の目を通して描かれるエルヴィスの1960年代の活躍の舞台は、ステージから映画に移っていった。それは、エルヴィス＝ロック＝不良＝反社会的存在というイメージを薄め、エルヴィスを世界の超大国アメリカの若者を代表し、誰からも愛される大スターに高めようとするパーカー大佐の戦略に基づくものだ。そんな戦略のおかげで、1967年3月までの中学、高校時代を愛媛県の松山で過ごした私の目や耳に入ってくるエルヴィスは『ブルー・ハワイ』（61年）一色に。その姿は数年後に大活躍する加山雄三と全く同じで、少しにやけた顔も同じだった。

しかし、1960年代のアメリカはケネディ大統領の暗殺（63年）、キング牧師をリーダーとした公民権運動等をはじめとする激動の時代だったから、ゴスペルを基本にしたエルヴィスのロック音楽が、『ブルー・ハワイ』等の映画路線と対立したのは当然。そんな対立は同時にエルヴィスとパーカー大佐との対立を意味していたから、本作中盤ではそんな対立と和解を繰り返す2人の姿に注目したい。

『アマデウス』（84年）では、一方的なサリエリのモーツァルトに対する嫉妬心とそれに基づく暗殺への道が描かれていたが、本作に見るエルヴィスの歌手や俳優としての人生は、パーカー大佐との対立と和解の繰り返しだ。エルヴィス最大の理解者であり絶対的養護者だった母親の死亡は1958年。陸軍を正式に除隊したのは1960年だから、1960年代におけるエルヴィスの活躍の表と裏、光と影を本作でしっかり確認したい。

## ■□■大学時代はプレスリーよりビートルズだったが・・・■□■

私が大阪大学に入学したのは1967年4月。そこから卒業する1971年3月までの4年間は、私の人生においても、日本や世界の情勢においても激動の日々が続いた。エルヴィスは1968年12月3日のクリスマス特別番組への出演を巡っては、例によって（？）パーカー大佐との大対決があったらしい。エルヴィスは1967年5月に結婚し、1968年2月に長女が生まれていたから、ビートルズの出現による歌手や俳優としての前途には不安があったものの、家庭的、精神的には最も安定していた時期。しかし、音楽を優先するのか、それとも映画を優先するのか、また音楽を巡っても、全アメリカの家庭に届くクリスマス・ソングを歌うのか、それともロックやゴスペルを歌うのか等の葛藤があったのは当然。さらに、ステージ優先か、TV優先かでも葛藤が・・・。

本作を観ているとそれらの葛藤がよくわかるが、1968年12月3日のクリスマス特

別番組は瞬間最高視聴率70%を記録したそうだからすごい。エルヴィスとパーカー大佐との間には度重なるさまざまな対決があったが、1969年7月31日に実現したラスベガスのインターナショナル・ホテルでのステージについては、2人は完全に和解。同一歩調で歩んでいたし、今後数年間の同ステージでの契約もされたから、エルヴィス（の収入）はしばらく安泰だ。さらに、1970年11月の映画『エルヴィス・オン・ステージ』も大ヒット。1973年1月14日にハワイから全世界へ衛生中継されたコンサートは、全世界で15億人の人々が見る世紀のコンサートになった。

学生運動から司法試験の道へ身を転じた私はそれら1970年以降の動きは全く知らなかったが、そんな風に活躍していたエルヴィスが1977年8月16日に42歳の若さで亡くなってしまったのは実に残念。“昭和の歌姫”と呼ばれた美空ひばりは、病魔との戦いを克服して復活し、1988年4月11日には東京ドームで「不死鳥コンサート」を開催した。それは50歳の時だから、それと比べても、エルヴィスの活躍は短すぎる、と言わざるを得ない。しかし、本作を観ればその完全燃焼ぶりがよくわかる。生前のエルヴィスを偲んで合掌！

2022（令和4）年7月13日記